

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K20039

研究課題名(和文) スポーツ指導者による運動部員に対する非人間化が体罰への容認的態度に与える影響

研究課題名(英文) The effect of dehumanization of extracurricular school sports members by coaches on the favorable attitudes toward corporal punishment

研究代表者

寺口 司 (Teraguchi, Tsukasa)

大阪大学・大学院人間科学研究科・招へい研究員

研究者番号：30779567

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：体罰根絶に対する先行研究のアプローチは「体罰への態度の改善」と「体罰の効果性の否定」の2点であったものの、「被害者に対する認識の改善」について検討がなされてこなかった。本研究の目的は、体罰の正当化に被害者(運動部員)に対する非人間化が影響しているかどうかを検討することであった。運動部員の非人間化について潜在的態度・顕在的態度の両面を検討したところ、顕在的に運動部員を動物的に見ることによって体罰に対してより容認的な態度を持つことが示された。また非人間化の信念は固定的な特性ではなく、変動する状態的な信念であることが示唆される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

体罰の容認的態度を引き起こす要因として、これまでは体罰という行為そのものやその結果への認知のみが扱われてきた。しかし本研究で扱った「被害者への認知」が損なわれた場合、たとえ体罰が悪いと認識していたとしても体罰を容認する可能性がある。本研究の結果から被害者への認知のうち、運動部員への非人間化によって体罰を容認する危険性が示唆できたことは、社会的意義があると言えよう。特にこれらは部員の態度や行動などから容易に変わりうる可能性も見られる。今後はこの結果を元に、部活動指導者に対して運動部員に対する認知枠組みを改善する教育プログラムなどが提案される。

研究成果の概要(英文)：Although previous research approaches to the eradication of corporal punishment have focused on two points, "improving attitudes toward corporal punishment" and "denying the effectiveness of corporal punishment," "improving perceptions toward victims" has not been examined. The purpose of this study was to examine whether dehumanization of victims (athletes) influences the justification of corporal punishment. The results showed that the dehumanization of athletes, both latent and explicit, was associated with a more permissive attitude toward corporal punishment when athletes were explicitly viewed as animals. The results also suggest that dehumanization beliefs are not fixed traits, but fluctuating state beliefs.

研究分野：社会心理学

キーワード：体罰 非人間化 潜在的態度

### 1. 研究開始当初の背景

部活動等でのスポーツ指導者による体罰が社会問題となっている。体罰は学校教育法第 11 条で明確に禁止されているにもかかわらず、2016 年度には全国の学校において年間 1000 人以上の被害者が出ており、その約 25%が運動場面で起きている(文部科学省, 2016)。2012 年に体罰被害者の運動部員が自殺する事件も発生しており、体罰の根絶は急務である。

指導者が体罰を行う要因として、「体罰を行ってもいいとする傾向(=体罰への容認的態度)」が挙げられる。この容認的態度こそが体罰の使用に繋がるため(e.g., Burak et al., 2013; Holden et al., 2014)、体罰への容認的態度を改善することが体罰防止には不可欠である。この点について、これまで「体罰は不要かつ許されないものである」という態度を指導者に持たせようという点から指導者教育が行われてきた(日本体育協会, 2015; 大阪体育大学, 2017)。同時に、国外では体罰が被害者にもたらす悪影響を示す実証研究が多数行われ(e.g., Gershoff, 2002; Lansford et al., 2014)、体罰の危険性の周知という点からも体罰の抑止が行われている。

これまでの研究および指導者教育は体罰という行為そのものへの認知の改善と体罰がもたらす悪影響の周知に着目してきた。しかし、社会心理学の観点からすると、これだけでは体罰を根絶することができないと考えられる。体罰のような非倫理的行為の実行を説明するモデルとして「道徳からの選択的離脱(Selective Moral Disengagement; SMD)」が知られている(Bandura et al., 1996)。SMDでは、非倫理的行為の実行の際に「その行為が非難されるべき行為であり(行為への認知)」「有害な結果を伴い(結果への認知)」「被害を受ける被害者がいる(被害者への認知)」という3つの認知があれば、その行為に罪悪感を覚え、抑制されるとしている。逆に、この3つの要因のうち1つでも欠けた場合、その行為は正当化され、実行できるというモデルである(図1)。つまり、現行の指導者教育によって「体罰が非難されるべき行為である」と認知するようになるろうとも、例えば「部員は体罰を受けるに値する悪いこと(例:規律違反)をした」と認知していれば体罰は容認される。体罰に関わる先行研究や指導者教育の多くは「体罰は悪い行為である」「体罰は運動部員に悪影響を及ぼす」という行為・結果への認知にのみアプローチしており、これだけでは被害者への認知から体罰を容認する可能性が残されている。

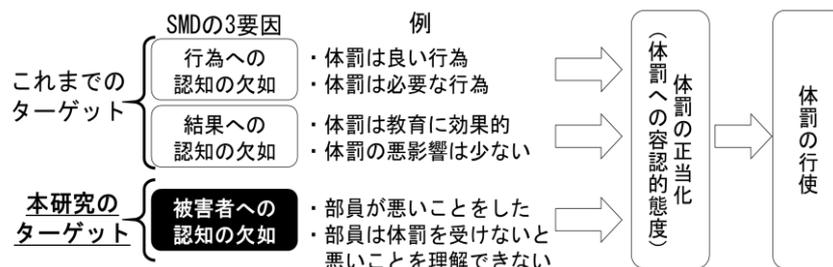


図1 SMDに基づく体罰行使のメカニズムと本研究の位置づけ

### 2. 研究の目的

これまでの研究では被害者への認知が欠如することによって生じる、体罰への容認的態度形成過程を検討してこなかった。そこで本研究では、被害者への認知の欠如をもたらしものとして、SMDの中で提唱されている「非人間化」と呼ばれる現象に着目する。非人間化とは対象を人間以外のものとして見なす現象である。非人間化が行われると対象への共感性が減少し、被害者への認知が損なわれる(e.g., Bandura et al., 1996)。この非人間化を指導者が運動部員に行っているために体罰が容認される可能性がある。

Gray et al. (2007) は、成人が「子供には成人と犬との間程度の主体性しかない」と認知していることを示している。主体性とは意図的に物事を考えられる程度であり、近年の研究で対象の主体性認知が下がると非人間的に認知することが示されている(Formanowicz et al., 2018)。つまり、指導者が自身の経験の中で、部員を主体的な対象と認知しないために、人間未満と認知し、体罰が容認されると考えられる。この主体性認知は知性認知と連動しやすく(e.g., Takahashi et al., 2016)、学業場面に比べれば、スポーツ指導場面では部員が知性を積極的に示す機会が少ないため非人間化しやすいと考えられる。

このような被害者への認知に着目した実証研究は、先行研究とは一線を画する試みである。特に本研究ではスポーツ科学の知見に社会心理学の理論・方法論を援用することで、これまでなされてきた体罰研究では見られない新たな指導者教育法を提案することができる。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究1: 体罰の被害児童数と学力との関係

まず現状の体罰被害の実態把握のため、各都道府県の体罰被害児童数の検討を行った。これにあわせて体罰被害と非人間化との関連が見られるかを検討するため、実際の都道府県別体罰被害児童数と知性、つまり学力テスト成績との関連を検討した。これについて寺口・内田・大工(2018)では、過去5年間の各都道府県の体罰被害児童数と学力テスト成績(小学校・中学校)との関連を検討した。その結果、学力テスト成績が高い都道府県ほど体罰被害児童数が少ないこ

とが示された。ただし、この検討では5年間の値を平均化し、都道府県単位での分析を行っているため、各都道府県の違いが考慮されていない。そこで本研究では各都道府県を変量効果に含めたマルチレベル分析を行った。

#### 使用したデータ

各都道府県の体罰児童数は「体罰に係る実態把握（文部科学省，2013-2021）」に掲載されている公立の小学校・中学校での体罰被害児童数を使用した。また、学力テスト成績については「全国学力・学習状況調査（国立教育政策研究所，2013-2021）」における都道府県別平均得点を使用した。ただし、年度によって学力テストの難易度は異なると想定されるため、各年度内で標準化された得点を使用した。

## (2) 研究 2: 潜在的態度の検討

運動部活動における体罰の正当化に対して、運動部員に対する顕在的・潜在的非人間化が与える影響について検討を行うことを目的とした。非倫理的態度である非人間化態度を直接的に尋ねた場合、正確な回答を得られるかについては疑問が残る。社会的望ましさにより例え肯定的態度を持っていたとしても歪めた回答を行う可能性があるだろう。そこで言語的な尺度と同時に、IAT (Implicit Association Test; Greenwald et al., 1998) を用いて運動部員に対する潜在的態度 (i. e., 無意識) 指標の作成を試みた。

#### 参加者

クラウドワーク스에登録しているワーカー500名（男性：247名，女性：246名，不明：7名；年齢： $M = 40.64$ ， $SD = 10.48$ ）を対象とした。ただし、手続きのミス，DQS項目に反した人など落とした結果，分析に使用したのは472名（男性：232名，女性：239名，不明：1名；年齢： $M = 40.51$ ， $SD = 10.49$ ）であった。

#### 非人間化 IAT

単語と画像を使用した IAT を製作した。IAT では、画面の左右に「人間」「動物」「運動部員」「指導者」という単語（=カテゴリー）がそれぞれ表示されている。次に、画面中央に、いずれかのカテゴリーに含まれる刺激が現れる。参加者は、できるだけ早く画面中央の刺激を左右どちらかの適切なカテゴリーへ振り分けることを求められる。実験は大きく2つのブロックから成る。1つは「人間」と「運動部員」が同じ側にあるブロック，もう1つは「動物」と「運動部員」が同じ側にブロックである。もし、運動部員に対して動物としてのイメージを参加者が抱いている（=非人間化している）のであれば、「動物」「運動部員」が同じ側にあるブロックのほうが「人間」「運動部員」が同じ側にあるブロックよりも反応時間が短くなる。この反応時間の差を潜在的な非人間化態度として用いる。

この IAT では指導者—運動部員カテゴリーの刺激には単語を用いた。単語は2回の予備調査（予備調査1： $N = 100$ ；予備調査2： $N = 200$ ）から指導者・運動部員からイメージされる単語をそれぞれ5つ選出した。一方で、人間—動物カテゴリーの刺激には画像を用いた。人間の画像には AI により生成された人間画像を使用した (<https://this-person-does-not-exist.com/en>)。動物画像には先行研究 (e. g., Buckels & Trapnell, 2013; Viki et al., 2006) で用いられた動物カテゴリー単語を参考に動物の種類を選択した (図 2)。

人間			
動物			
指導者	コーチ	先生	大人
運動部員	生徒	練習	レギュラー

図 2 非人間化 IAT に使用した項目・画像

#### 体罰正当化

架空の体罰事件に関する記事を2本読み，問題となった教員に対して「不当な」，「有害な」，「悪意のない（逆）」などネガティブな認知をそれぞれ13項目5件法で尋ねた。点数が低いほど，体罰を正当化していることを示す。なお体罰事件記事については予備調査 ( $N = 100$ ) により回答の偏りが少ないものを選出している。

#### 非人間化尺度

運動部員，指導者それぞれに対して顕在的な非人間化（動物化，機械化）を各4項目6件法で尋ねた。分析には「運動部員」得点から「指導者」得点を引いた相対指標を使用した。

#### 手続き

実験はすべて Web 上で行われた。全ての参加者にはまず非人間化 IAT の実施を求め，その後質問紙への回答を求めた。質問紙内では体罰正当化，非人間化尺度の順に回答を求めた。

## (3) 研究 3: 順序効果の検討

研究 2 では体罰記事を読んだ後に非人間化尺度に回答してもらった。しかし，体罰シナリオを読んだことにより非人間化の程度が変化し，その変化により体罰正当化が起きている可能性，つまり順序効果が発生している可能性がある。そこで本研究ではランダムに半数の参加者には体罰記事を読んだ後に非人間化尺度を，もう半数の参加者には非人間化尺度の回答の後に体罰記事を読んでもらい回答を求めた。

#### 参加者

参加者はクラウドワーク스에登録しているワーカー300名であった。ただし，手続きのミスな

どから 50 名を分析の対象外とし、分析の対象となった参加者は 250 名（男性：98 名，女性：150 名，不明：2 名；年齢： $M = 39.95$ ， $SD = 10.32$ ）であった。

#### 潜在指標

先の研究 2 で使用した非人間化 IAT を使用した。あわせて体罰そのものに対する潜在的態度も計測するため、体罰 ST-IAT (大工他, 2018) も実施した。

#### 顕在指標

体罰正当化や非人間化尺度など、先の研究で使用した項目と同様のものを測定した。ただし、妥当性を高めるため、体罰正当化については読む体罰記事の数を 2 本から 3 本に変更した。

#### 手続き

研究 2 と同様に、実験はすべて Web 上で行われた。まず潜在指標の測定を行い、その後顕在指標の測定を行った。ただし、研究 2 とは異なり、体罰正当化と非人間化尺度への回答のタイミングを入れ替えている。ランダムに半数の参加者には体罰記事を読み体罰正当化に回答した後に非人間化尺度を、もう半数の参加者には非人間化尺度の回答の後に体罰記事を読んで体罰正当化への回答を求めた。

## 4. 研究成果

### (1) 成果① 学力が低い年度ほど体罰被害児童数が多くなりやすい (研究 1)

2012 年度から 2020 年度にかけて国内の公立小中学校での体罰被害児童数は約 8000 名から約 500 名にまで低下している。その中で各都道府県における年度間の被害児童数の変動が学力の変動で説明が出来るのか、被害児童数を目的変数、都道府県を変量効果とした一般化線形混合モデルの検討を行った。分布にはポアソン分布を仮定している。その結果、小学校での体罰被害児童数に対して、国語の成績が低いほど被害児童数が多い負の関係 ( $B = -0.015$ ， $SE = 0.003$   $p < .001$ ) が示された。これはマルチレベル相関 ( $-.464$ ， $p < .05$ ) でも認められる。これらから、先行研究同様、体罰行使と被害者の知性、つまり被害者の人間化との間に負の関連の可能性が示された。

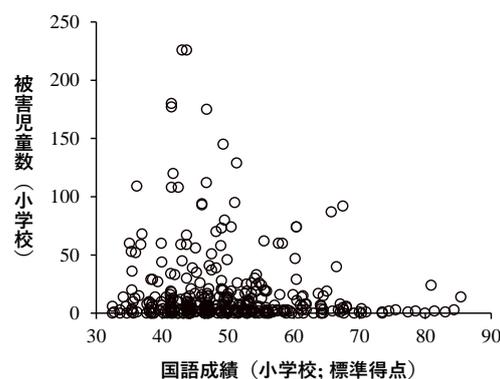


図 3 体罰被害児童数と学力

### (2) 成果② 運動部員への顕在的な動物化が強いほど、体罰を正当化しやすい (研究 2)

非人間化 IAT については年齢が高いほど運動部員と動物との連合が強いことが示された ( $r = .176$ ， $p < .01$ )。非人間化 IAT を目的変数とする重回帰分析では、有意傾向ではあるものの、顕在的非人間化とも正の関連が認められる ( $B = -0.055$ ， $p < .10$ )。このことから作成した非人間化 IAT についてはある程度の妥当性が確認できる。

体罰の正当化に対して運動部員への潜在的・顕在的非人間化が影響を与えるのかを検討するため、目的変数に体罰正当化、説明変数に非人間化 IAT と非人間化尺度およびパーソナリティ変数を投入した重回帰分析を行った。その結果、指導者よりも運動部員をより動物化しているほど体罰が正当化されることが示された ( $B = -0.158$ ， $p < .001$ )。この影響は性別や年齢、体罰への態度などを統制した上でも示される。一方で潜在的な非人間化では体罰正当化に対する影響は認められなかった ( $B = -0.015$ ， $n. s.$ )。以上から運動部員に対する動物的な認識によって体罰を正当化する傾向が示唆された。

### (3) 成果③ 運動部員に対する非人間化は状態的である (研究 3)

まず顕在的非人間化について、体罰事件記事を読む前後で違いがあるかを検討するために重回帰分析を実施したところ、体罰事件記事を読む前に回答した場合よりも読んだ後に回答した場合の方がより非人間化することが示された ( $B = -0.787$ ， $p < .001$ )。

非人間化尺度の提示順序によって動物化得点に差異が認められたため、提示順序ごとに分析を行った。その結果、体罰の正当化について回答した後に非人間化尺度の回答を行った群では、運動部員に対する相対的な動物化が体罰の正当化に対してポジティブな影響を与えていた。一方で非人間化尺度に先に回答した群ではその傾向は認められなかった (表 1)。加えて非人間化 IAT、体罰 ST-IAT はいずれも体罰正当化に影響を及ぼさなかった。以上から、運動部員に対する動物的な認識によって体罰を正当化する傾向は研究 2 に引き続き示された。ただし、この非人間化は個人の固定的な特性として働くのではなく、個々の状況に応じて変動する状態的な信念として影響することが示唆された。

表 1 体罰正当化に対する非人間化と順序効果の影響

	非人間化→シナリオ				シナリオ→非人間化			
	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>t</i>	$\beta$	<i>B</i>	<i>SE</i>	<i>t</i>	$\beta$
切片	4.707	0.554	8.500	***	4.229	0.440	9.623	***
性別：男性	-0.403	0.134	-3.008	-.258 **	0.085	0.111	0.765	.062
年齢	0.010	0.008	1.212	.111	0.005	0.005	0.903	.080
運動部活動経験：1年以上	0.127	0.131	0.971	.082	0.013	0.115	0.110	.009
学歴：大卒未満	-0.184	0.142	-1.290	-.108	-0.027	0.118	-0.232	-.018
一次性サイコパシー	0.090	0.175	0.517	.051	0.100	0.141	0.708	.068
二次性サイコパシー	-0.099	0.129	-0.769	-.072	-0.139	0.121	-1.148	-.099
<b>動物化（相対）</b>	<b>0.093</b>	<b>0.094</b>	<b>0.998</b>	<b>.088</b>	<b>-0.190</b>	<b>0.089</b>	<b>-2.151</b>	<b>-.222 *</b>
機械化（相対）	-0.185	0.116	-1.589	-.140	0.123	0.098	1.256	.126
<b>IAT Dスコア</b>	<b>-0.154</b>	<b>0.149</b>	<b>-1.031</b>	<b>-.091</b>	<b>0.148</b>	<b>0.119</b>	<b>1.246</b>	<b>.107</b>
<b>ST-IAT Dスコア</b>	<b>0.220</b>	<b>0.183</b>	<b>1.201</b>	<b>.100</b>	<b>-0.052</b>	<b>0.197</b>	<b>-0.266</b>	<b>-.021</b>
体罰神話	-0.566	0.087	-6.534	-.567 ***	-0.387	0.079	-4.932	-.456 ***
	<i>Adj R</i> <sup>2</sup>	.339			.222			

## 引用文献

- Bandura, A., Barbaranelli, C., Caprara, G. V., & Pastorelli, C. (1996). Mechanisms of moral disengagement in the exercise of moral agency. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 364-374.
- Buckels, E. E., & Trapnell, P. D. (2013). Disgust facilitates outgroup dehumanization. *Group Processes and Intergroup Relations*, 16, 771-780.
- Burak, L. J., Rosenthal, M., & Richardson, K. (2013). Examining attitudes, beliefs, and intentions regarding the use of exercise as punishment in physical education and sport: an application of the theory of reasoned action. *Journal of Applied Social Psychology*, 43, 1436-1445.
- Formanowicz, M., Goldenberg, A., Saguy, T., Pietraszkiewicz, A., Walker, M., & Gross, J. J. (2018). Understanding dehumanization: The role of agency and communion. *Journal of Experimental Social Psychology*, 77, 102-116.
- Gershoff, E. T. (2002). Corporal punishment by parents and associated child behaviors and experiences: A meta-analytic and theoretical review. *Psychological Bulletin*, 128, 539-579.
- Gray, H.M., Gray, K., & Wegner, D.M. (2007). Dimensions of mind perception. *Science*, 315, 619-619.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Holden, G. W., Williamson, P. A., & Holland, G. W. O. (2014). Eavesdropping on the family: A pilot investigation of corporal punishment in the home. *Journal of Family Psychology*, 28, 401-406.
- Lansford, J. E., Sharma, C., Malone, P. S., Woodlief, D., Dodge, K. A., Oburu, P., Di Giunta, L. (2014). Corporal Punishment, Maternal Warmth, and Child Adjustment: A Longitudinal Study in Eight Countries. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 43, 670-685.
- Takahashi, H., Ban, M., & Asada, M. (2016). Semantic Differential Scale Method Can Reveal Multi-Dimensional Aspects of Mind Perception. *Frontiers in Psychology*, 7, 1-5.
- Viki, C. T., Winchester, L., Titshall, L., Chisango, T., Pina, A., & Russell, R. (2006). Beyond secondary emotions: The infrahumanization of outgroups using human-related and animal-related words. *Social Cognition*, 24(6), 753-775.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内田 遼介・寺口 司・大工 泰裕
2. 発表標題 指導者 アスリート間における「信頼関係」の意味に関する探索的検討
3. 学会等名 本体育・スポーツ・健康学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 寺口 司・大工 泰裕・内田 遼介・中妻 拓也
2. 発表標題 運動部員への非人間化が体罰の正当化に及ぼす影響
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------